

『対話と承認』についての〈対話〉の記録の現時点でのまとめと感想

作成者: 想田瑞恵

2012年8月18日

○哲学コースの「コースの声」に寄せて

2012年3月、私は哲学主専攻哲学コースを卒業し、卒業生として「人文学類案内」哲学主専攻哲学コース「コースの声」を執筆しました。それが以下のものです。

=====

まず、偉そうですが、予言をしてみます。

「人それぞれ考えていることは違うから」と他者の考えに寛容であり、自分の考えも押し付けず、常に相対的な視点から発言する人。「自分らしさ」を信じており、「あなたはどう思いますか」と言われると、他と違うことを張り切って言おうとする人。こうした人は、おそらく哲学コースで人生最大級の忍耐か自己変革を迫られるでしょう。

さて、上記の人物は全て私の一部です。私は「善悪とは何か」などのいわゆる哲学的な問いを、実感のこもった問いとして持つことはありませんでした。哲学コースに在籍してなお、私にとっては、「きちんと仲間だと認めてもらえているか」や「嫌われたかな。どうしよう」といった問いのほうがよほど切実だったのです。このことは、冒頭の一文に「偉そうですが」と付け足さずにはいられないことから推測できると思います。では、なぜ後半の問いには実感がこもっており切実なのでしょう。あるいは、なぜ私は自分には実感がもてない問いについての哲学の授業に参加するのでしょうか。「人それぞれ」でごまかしてきた私には答える言葉がありませんでした。相対的な視点はあっても肝心の自分の思想の足場が鍛えられていなかったのです。哲学コースでは、自分の中の一貫性(信念)を追求することで、足場を鍛えることができます。この追求に私は哲学の醍醐味を感じます。

予言を最後にもう一つ。これは自分にとってもまだ予感でしかありませんが。

「自己変革や忍耐を迫られても授業に挑み続けるなら、たとえ世界を閉じてしまいたくなるほど辛いことがあったとしても、世界に立ち向かえるだけの強さを、拠り所を、精神的な体力を、哲学コースで得られるでしょう」。

=====

もともと私は史学を選択するつもりで筑波大学に入学しました。一年次に「哲学通論」を受講したのは、単に教職科目であったからと、「自分は哲学が好き」だと思っていたから。そして「哲学が好きなきことが自分の個性である」と思っていたからでした。それが、何を勘違いしたのか、むしろ勘違いしかしていないのか、哲学コースを選択してしまったのです。おそらく、檜垣先生の対話形式の授業では、発言を否定されても、無視されたり流されたりはしないことに味をしめたのでしょう。私は「私に注目してもらおうこと」や「私の意見を聞いてもらおうこと」を何より欲していますから。つまり「そういう意見・考え方もあるね」と認めてもらい、できれば「面白い意見だね」とお世辞でも誉められることを期待して、哲学コースに進んだのでした。

勘違いの一つ目は「注目されなければ承認されない」と考えていたことです。「注目を浴びるような発言をしなければ存在しないのと同じだ」と必死になりました。簡単に言ってしまうと「すごいことを言って誉められよう」と授業に臨んでいました。しかもここに、「そういう意見・考え方もあるね」と肯定されることしか求めていない、という勘違いが加わります。相手の意見を変えようとせず、自分の意見も変えようとしないまま発言する。それでいて、「私は哲学が好きでそれこそが私の個性なのだ」とも勘違いしていますから、どうしようもありません。哲学的問いを本気で追及したいわけではないのに、それに関心があるかのように振る舞い、またそれに関心があると勘違いしたまま哲学コースに進んだ私は、忍耐(その果ての休学含む)か自己変革かを迫られることになりました。

結局、私が「忍耐」か「自己変革」のどちらを選んだのかは断言はできません。「自己変革」したと

も言えます。少なくとも、今の私は「個性的だね」と放っておかれるよりも、相手との共通理解(合意)を増やすことを望みますから。けれど、それは、「理性を信じそれに従おうとしているから(自分と相手の尊厳を信じているから)」というよりは、「より深く自分が承認されることで安心したいから」でしょう。承認欲求が常に先行することには変わりはありません。哲学コースに在籍してなお、「お世話になった方にちょっとした贈り物をする」くらいは平気でやります。しかも傲慢にも「プレゼントして悪いことはないだろう」と思って。

けれど、たとえ「承認欲求を常に先行させる」というあまり誇れるものでなくとも、それが私の現時点で見出している一貫性(信念)です。こうした思想の足場がしっかりしていれば、自分の言動にも責任が持てます。自分を信頼してもいいと思え、引き受ける覚悟もできます。このことが「コースの声」最後の「予感」につながりました。

○「引き受けること」と自由

さて、「対話と承認についての〈対話〉の記録」2011年2月3日「自由と拘束性」では、「そうしないこともできる選択の自由にそれほどこだわらなくてもいいのではないか」という意見が出ました。そのときの私はその意見を理解することはできませんでしたが、上記のような予感を持つ今は、かなり納得できていると思います。「信念」について、「その信念を持たないこともできた」と言うことは無意味です。というのも、「その信念」の内容・中身は、極端に言ってしまえば、何でもよいと思うからです。つまり、「どのような信念を持っているか」という内容よりも、「信念に基づいて行為したか(信念に反する・嘘をついた行為をしていないか)」という形式のほうが、重要であると考えます(定言命法を手続きと考える)。そして、それはもしかしたら、「承認欲求を常に先行させる」ではなく、「嘘をつかない」を信念にしているということなのかもしれません。

「承認欲求を常に先行させる」にしる「嘘をつかない」にしる、私はそうした信念を他のものと比較して選んだわけではありません。けれど、「信念」である以上、意志しているわけですから、「なんとなくそれが信念になった」というわけでもない。この意味で「そうしないこともできる選択の自由」ではなくとも、なんらかの自由はあると考えられます。授業や「対話」を通して信念を鍛えることで得られる強さ・拠り所とは、そうした自由のことでしょう。すると、確かに「どのような信念を持っていてもよい」のですが、内容・中身も問題になってきます。なぜなら、「それは本当に信念なのか」、「いかなる場面でも万人に通じると思えるほどの一貫性を持っているのか」が、常に問われそれに応えることではじめて「なんとなくそうなったわけではない」と言えるからです。この自由のために「対話」は必要となります。就職した私が、落ち込むことはあっても「この会社で働かないこともできたのに」のように悩まず、「今の場所で頑張るにはどうしたらいいか」を考えられるのは、この「対話と承認についての〈対話〉の記録」があるおかげだと思っています。

○定型的なまとめの言葉も自分固有の言葉も語らない

ここで、上述の『対話と承認についての〈対話〉の記録』があるおかげとはどういう意味でしょうか。例えば、「～のおかげ」という文は、続けて「世間(教師や親や友人)に対する感謝の言葉」が来ることを予想させるものではありませんか。実際この文章は、途中まで感謝の言葉で締めくくつもりでした。しかし、書きながら思ったのですが、これではキレイにまとめすぎている。「キレイにまとめすぎている」という言葉すら「キレイ」なのですが、「キレイ」とはここで「失礼のない言葉」、「誰からも批判されない言葉」のことです。

一応、そうした誰からも批判されない定型的なまとめの言葉として、「～のおかげ」を使ったわけではありません。そうした毒にも薬にもならないロボットのような言葉の「失礼さ」は、一年次の「哲学通論」で課題となった『〈対話〉のない社会』(中島義道、PHP新書)でも檜垣先生の授業でも、繰り返言われてきました。けれど、その「失礼さ」ではなくとも、このまとめの文章や「承認欲求を先行させて哲学の授業に参加すること」には、別の「失礼さ」があるように思います。

「失礼」という表現は、『〈対話〉のない社会』の29ページに出てきます。中島氏が大学の授業で

「語ること」を要求することで、学生の中には「わからないからもう一度説明してほしい」と発言したり、説明を自分の言葉で言い換えたり、説明の矛盾を意見として述べたりする者も出てきます。けれど、一年間黙り続けた学生もおり、氏は彼らに学年度末試験として口頭試問を課すことにします。その様子が28ページから描かれていて、Aさん、B君、C子さんが登場するのですが、特に印象深いのがB君です。彼は黙っていた理由を「授業内容がわからないから」と答え、氏が「なぜそう言わなかったのか」と聞くと、「先生に失礼になると思ったから」と答えるのです。私はその箇所を初めて読んだとき、「Bは馬鹿だなあ」と思いました。「中島氏にとって何が失礼に当たるのか、中島氏が求めている答えが全然分かっていない」と。私なら授業中質問してみせることができます。意見を言うてみせることができます。それがここで求められている礼儀だと分かるからです。

けれど、この「分かる」は読解力や経験の賜物に過ぎません。『〈対話〉のない社会』は分かりやすく書かれているので、しっかり読めば、中島氏にとって、そしてそれを支持する檜垣先生にとって「失礼のない言葉」、中島氏や檜垣先生に「批判されない言葉」がどういったものであるのかは、ある程度分かるでしょう。まして私は檜垣先生の授業を四年間も受けています。檜垣先生の授業中は、「感謝の言葉」や「沈黙」よりも、「質問」や「意見」が「礼儀」だと分かっているので、そのように振舞うことにためらいはありません。

結局、B君を馬鹿にしてみせても、自分固有の言葉を語っていないという点で、私もB君と同じです。B君はB君なりに彼の人生経験から「授業における礼儀作法」を導き出しています。私も檜垣先生の授業を受けるときやこのまとめを作るに当たって、これまでの檜垣先生の授業から礼儀作法を導き出しています。また、B君はそうした彼の考える礼儀作法にのっとり、「授業内容が分からない」とは言わず、沈黙を通しました。私も、そうした私が考える檜垣先生に対する礼儀作法にのっとり、授業の話題に関心があるかのように振る舞い、質問や意見を言うてみせますが、「授業の話題自体には関心がないので討論に参加しません」とは言いません。自分の価値観(何を礼儀だと考えているか)については、やはりB君と同じく沈黙を通しており、「失礼」です。

要するに、感謝の言葉で締めくくるのは「失礼だから(檜垣先生の授業のまとめにふさわしくないから)」とそれをせず、「檜垣先生やこのまとめの読者に批判されない(失礼のない・キレイな)言葉」になるように、「感謝の言葉でまとめるのはふさわしくない(キレイすぎる)」と試みさせているということです。経験をつみ、「空気を読んでその場の礼儀作法に従うこと」を器用にやれるようになって、求められる礼儀作法は状況によって異なりますから、実際は何も身につけていないのと同じことです。これでは自分は嘘つきで空虚だという気にもなるでしょう。

長くなりましたが、こうした空虚さの救いが、『対話と承認についての〈対話〉の記録』があるおかげの意味となります。「記録が在る」ことは事実ですから、空っぽではないように思えるということです。したがって、「キレイに」言えば、同様に、コースの声における「授業に挑み続ける意味」も、ここにあるとっていいでしょう。